

2012年10月22日・西日本新聞「風車」欄では

韓国の現代文学

韓国語を学んでいる人たちが増えているが、日常会話からメールや手紙のやりとりも不自由ない人に、韓国文学について聞いてみると「まだ、そこまでは」という返事がなぜか多い。

最近、翻訳が出た雀仁浩（チェ・イノ）『他人の部屋』（コールサック社）を一読して惹き込まれた。表題作はじめ「酒飲み」「模範童話」など、11編の短編が収められている。韓国の風土に根差す豊かな比喩を駆使し、粘着度の強い文体で、少年期から青年期にかけてのひりひりするような心理を活写している。日本の作家では中上健次を連想させられる。

解説によると、作者は1945年生まれで、20歳代から頭角を現し「近代と現代が微妙に交差する時期の歪んだ生を照射し」新しい文学の担い手として数多くの作品を書いてきたそうだ。

それが過褒でないことは、読み終えて納得できる。この短編集に収録された作品のほとんどが1970年代初期のものである。時代でいえば朴正熙政権と重なる。軍事独裁のきびしい統制下にあつて、文学者の表現が複雑に屈折していたことも、雀仁浩の文体から察せられる。

朴大統領は日韓基本条約を結んで一時代を画したが、1979年10月26日に暗殺された。その当時と現在の韓国では政治・経済面でも大きな開きがある。雀仁浩も純文学から歴史小説の方向へ転じたそうで、近刊の長編『夢遊桃源図』（翻訳者、出版社は同じ）が同時に翻訳された。政治の民主化と経済の繁栄が、文学にどんな果実をもたらしているのか、近年の韓国の文学事情にも触れてみたい。（竹若丸）

と紹介されています。